

現場の獣医師からみた鶏の疾病の 発生状況とその特徴 (3)

人と鳥の健康研究所
川崎 武志

⑤外部寄生虫が関与するもの

ダニ類や昆虫類の鶏体表への寄生は、おもに開放式鶏舎で起こりやすいです。いずれも周囲環境に寄生あるいは単に物理的に付着させた動物の存在があると考えられます。毎年、ワクモの大量寄生の発生が全国各地であります。とくに野鳥が鶏舎に近づいたり侵入したりすることと関係したと推定されるケースが少なくありません。野鳥においても羽毛の間に付着しているワクモはいつでも脱落して別の場所へ移動することができるため、鶏舎内に入らなくても、寄生を受けている野鳥が軒先にとまったりするだけでもワクモの侵入を許すことになります。いったんワクモが鶏舎内に侵入すると、駆除は極めて困難であることから、日頃から侵入機会の防御を想定して、野鳥の鶏舎への接近を防止することが重要です。たとえば、飼料タンク周辺に飼料がこぼれたまま放置するなどを防ぐことは徹底しておくべきですし、できれば鶏舎の軒先なども野鳥が巣作りしにくい構造にするなどの工夫が必要になります。

皮膚の表面がザラザラになり、フケが異常に増えたり羽毛が抜け落ちたりして、鶏がたえず局所を突いたり気にしたりしている場合、ニワトリアシカイセンダニやニワトリオオハジラミの寄生を疑ってみる必要があります。ニワトリアシカイセンダニが寄生することで起こる疥癬は、局所の剥がれ落ちた皮膚やフケを掻きとって顕微鏡で観察することで確認することができ、ニワトリオオハジラミは、皮膚の皺の間を丹念に調べることで小さく赤いシロアリのような形をした虫体を発見することができます。これらは寄生して時間が立つほど皮膚の状態が悪化して二次感染などによって予後が悪くなることもあるため、できるだけ早期に発見して駆虫することで問題が大きくなるのを防ぐべきです。野鳥などの媒介のほか、鶏群に途中で導入されてくる鶏によって侵入するケースも見受けられます。

⑥その他

近年の商用飼育鶏は、採卵用、肉用いずれにおいても本来の鶏の生理機構をはるかに超越して産卵能力や肉付きといった特定の機能に特化した生産力を発揮するように育種改良が進んできています。さらに育種改良に伴って、感染症に対する感受性も少しずつ変化してきている可能性があります。商業的な育種ブランドについて抗病性に関する具体的な改良目標と達成レベルは明らかになりにくいです。現場の感覚としては、以前と比べてかなり良い方向に変化してきている印象があります。もちろん、ワクチン接種や環境整備のほか飼育技術の向上の集大成というところもあります。一方、飼育マニュアルも少しずつ変化してきており、栄養については生産要求を満たすためのバランス(人的要素として原料配合、給与量、鶏側の要素として吸収・利用特性など)レベルも大きく変化していることがうかがわれます。しかし、肉や卵だけを効率よく作り出す性質だけを引き出していくうえで、鶏が鶏という生物として存在し得る限界があるのもまた事実でしょう。これまでひたすら生産効率に重心を置いた育種改良が続けられてきた結果、今日では最大限に経済的優位性を満足させる育種ブランドが選択され、世界中の生産をシェアするようになったわけですが、ここ数年、これらの高パフォーマンスブランドの鶏において、飼育途上でさまざまな生理機能障害を起こして死亡したり淘汰されたりするもの

が急増したり、処理場で変性などの器質的な異常が発見されて廃棄処分にされるものが増えたりということを目にするようになってきました。鶏の基礎的な健康状態に生じる持続的な問題は、二次的に微生物感染を引き起こす素因になります。したがって、広く環境や生体に常在している種類の微生物が突然症状の発現をともなう感染症(=前述したような感染症のほか、真菌感染によるもの)を引き起こすようになったときは、通常の飼育状態について再点検をしてみることも必要でしょう。(おわり)

